
真実は目の前に

トーラー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真実は目の前に

【Nコード】

N9263Q

【作者名】

トラー

【あらすじ】

高校時代から付き合っていた男に裏切られ逃げるように他県へと就職した千草。

だが3年後千草の勤める会社上司として元恋人・悠也が現れた。痩せて引き締まった体に冷たい目。

すっかり昔の面影がなくなった悠也だが千草を見つけると驚きで目を見開きすぐ憎しみのこもったような鋭さで千草を睨みつけてきた。その後何かと接触してくる悠也を理由をつけて何とか避け逃げてい

た。

千草には悠也に絶対知られてはいけない秘密があったのだ・・・。

ブローグ

「やっぱーっ。遅くなっちゃったよ」

千草は急いで廊下を走っていた。

思ったよりも教授の話が長く捕まってしまう待たせていた恋人である悠也の元へ急いでいたのだ。

「怒ってるかな。待たせるとうるさいしな」

教室で待っているだろう悠也の怒った顔が思い浮かぶ。

教室の目の前まで来ると立ち止まり様子を窺^{うかが}おうと音をたてないよう静かに扉を開いた。

その時。

目の前の光景に自分の目を疑った。

奥からこみ上げてきて声も出ない。

そこには悠也と同じサークルの女の子が抱き合ってキスをしていた。

千草は耐えられずそこから逃げ出した。

再会（前書き）

のろのろペースですがお付き合いいただけると嬉しいです。

再会

ありえない・・・。

森崎千草は目の前に立っている男から視線をそらす事が出来なかった。

体は凍りついたかのように動かない。

「榊悠也です。本日から2ヶ月ですがお世話になります」

「あゝ本社からの助っ人で来てくれた榊くんだ。この若さでかなり仕事ができる！榊くん期待してるからな」

「ありがとうございます」

部長の高瀬からの言葉に悠也は笑みを浮かべて頭を下げた。

大学時代の時よりも痩せ冷たい雰囲気。

しかし相変わらず整った顔は部署の女の子たちに人気のように黄色い悲鳴が上がっている。

視線をそらせずにいると悠也と目が合った。

悠也は驚きに目を見開いたがすぐに笑みを貼り付け高瀬へと視線を向けた。

そんな悠也を千草は無意識に目で追ってしまふ。

「森崎くん」

高瀬に呼ばれた千草はすぐに悠也から視線をそらした。

「何でしょうか」

「そろそろ森崎くんにも大きい仕事をしてもらってもいい頃だと思
つてな。今回の企画榊くんによってもらおうと思ってるんだがその
補佐を君によってもらいたい」

え！？

大きい企画に関われるのは嬉しいけど悠也の補佐！？

すぐに断ろうと口を開きかけたがそれよりも高瀬が先に「頼むよ」
と言って話を終了させてしまった。

結局言いそびれた千草は請け負うことになった。

再会 2

朝礼も終わりみんな個々の仕事へと戻っていく。

千草も自分の席へ戻ろうとした時悠也に呼び止められた。

「森崎さん、ちょっといい？」

女の子がされたら見惚れてしまいそうになる笑みを浮かべて近寄ってくる。

凍りついたようにその場に立っていた千草の脳裏ではあの教室での出来事が頭の中を巡っていた。

近づかないで！

そう叫んでやりたい気持ちでいっぱいだったが今は職務中だと自分に言い聞かせて悠也が目の前までくるのを待った。

ようやく立ち止まった悠也はかなり近くにいて下を向いていた千草の耳元へとささやく。

「久しぶりだな、千草。この会社にいたなんて驚いたよ」

耳に息がかかる。

千草の全身に鳥肌が立つ。

「や・・・っ」

千草はおもわず悠也を突き飛ばした。

顔を上げれば歪んだ笑みに冷たい目をした悠也の顔があった。

「どうしたの？森崎さん」

何事かとチラチラ送られる視線。

怒りで吐き出してしまいそうになる言葉たちをここは職場だと再度自分に言い聞かせて抑えた。

「何でもないです・・・仕事に戻ってもいいですか？」

千草は悠也の返事を聞く前に自分の席へと戻った。

千草の秘密

何度も接触しようとしてくる悠也をなんとかかわしながらようやく仕事も終わり千草はすぐに帰る用意をして席を立った。さっさと職場を出てエレベーターへと乗り込む。

本当に最悪な一日だったわ・・・。

心の中で大きなため息をつきながら早く会社から離れようと足早に受付の前を通り過ぎた。

「千草っ」

少し会社から離れたところで腕を掴まれ呼び止められた。振り返ると少し息を乱した悠也が離さないように手に力をこめて千草を見ている。

「・・・名前呼び捨てにしないでもらえますか？」

まさか追いかけてくるとは思わなかった千草は悠也に動揺しているのがばれないように感情を抑えながら突き放すように言い放ち痛む腕を振り払った。

そのまま悠也を置いて歩き出した。

「待てよっ！俺の話しも聞けよ。お前・・・なんで別れようなんて言っただんだ！？納得しなかった俺の目の前から消えて・・・っ」

「ちょ・・・こんなところで大きな声出さないで!!」

人通りの多い場所で叫ぶ悠也に千草は駆け寄ると腕を掴んで近くに
あった公園へと入った。

薄暗くなっていたせいかもしれないもは子供の遊び声が響き渡っている公
園は静まり返っていた。

「どういつつもりよ！？あんなところで大きな声出してっ」

「お前が話を聞こうとしないからだろ？会ったら聞きたかったんだ、
別れたかった理由。あんな一方的に別れつけられて俺が納得してな
かったのわかってるだろ？」

「・・・」

悠也は私が知らないと思ってる・・・。

何も知らずに一人で怒ってそれをぶつけてくる悠也がおかしくて千
草は笑った。

その様子に悠也はムツとした顔をする。

「何がおかしい？」

「だって・・・もう終わったことなんだからいいでしょ？今からた
だの仕事仲間。それだけ。もういい？私これから用事があるのよ」

千草は公園についている時計を見上げると時間を確認し踵をかえし
た。

「待てよ！まだ答えを聞いてないぞ！？」

「・・・私があんたを嫌いになっただけ」

それだけ言い放つと千草は公園を出た。
その後を悠也が追いかけてくることはなかった。

千草の秘密2（前書き）

遅くなりました・・・。

前の話を編集しなおしたのでまたよろしかったら読み直してみてください。

千草の秘密2

悠也と別れ千草は目的の場所へと急いでいた。
しかし歩きながらも千草の言葉で傷ついていていた悠也の顔が頭から離れずにいた。

「だめね・・・許せないのに」

許せないのに憎いのには嫌いにはなれずにいた。

本当はもつと言ってやりたいこともたくさんあったのにあの顔を見たらもう何も言えなかった。

だから2か月という短いような長いような期間悠也に接触するのは徹底的に避けよう。

千草はそう決めた。

目の前に見えた目的地に自然と小走りになる。

「悠貴！」

先生と手をつなぎながら待っている我が子に走り寄り抱き上げる。

「ママっ」

千草の首に腕をまわし頭を擦り寄せる。

「いい子にしてた？」

「うん・・・きょうね、ここちゃんとおやまつくった」

保育所を手をつないで出ると二人は家へと帰りごはんを食べていた。今日あったことを一生懸命話す悠貴を見ながら千草は微笑み相槌をうつ。

悠貴の顔はますます悠也に似てきていた。そんな気がしていたのだが今日まさかの再会をして改めて思ったのだ。

悠貴の「悠」は父親であつたはずの悠也の字から一字もらっている。悠貴に少しでも父親を残してやりたかつたのだ。

「ママ？どうしたの？」

「え？」

「どこか痛いのか？だから泣いてるの？」

驚いて顔を触つてみると涙に濡れている。

何で……。

何でいまさら現れたの？

会わなければ私は強く生きようと頑張れた。

再会してしまった今また私は……。

弱くなっていく自分の心を叱りながら千草は不思議そうな顔をして見ている悠貴を抱きしめた。

息子（前書き）

あまりの亀ぶりに涙が出そうです・・・。

息子

「おはようございます」

「・・・おはようございます」

悠貴をいつものように保育園へ送り届けた千草は重い足取りで会社に入った。

仕事場まではなんとか会わずにすんでホッとしていたのもつかの間、悠也は千草のデスクの横に立っていた。

何もなかったような顔をして千草を見ている。

「森崎さんっていつもギリギリなの？」

「え・・・あ・・・すみません。どうしても朝は・・・」

悠貴がいつも朝行くときにぐずってしまっっていつもギリギリになってしまうのだ。

でも悠也には子供の話はしたくない。

ちよっとしかいないならその間ばれないように気を付けたらいい。上司にしか伝えていないのだし大丈夫だろう。

「この前部長も言っただけで君には俺の仕事を手伝ってもらっ。今回の仕事は俺にとっても絶対成功させたい大切な企画なんだ。だからこんな気の緩みを見せられると不安になる」

千草を鋭い目で見つめながら吐き出された言葉に千草はぐっと唇をかみしめて怒りを堪えた。

「すみませんでした。以後気をつけますので」

「そうしてくれると助かる」

悠也はそう言々と自分の席へと戻って行った。

千草はその背中を睨みつけながらやり場のない怒りと必死に闘っていた。

息子2

本格的に悠也の仕事の補佐を始めると部長が褒めていたのもうなずける。

それぐらい悠也は仕事ができた。

しかしそれに感心する一方で千草は毎日のように側にいなければならぬ苦痛の日々を必死に耐えていた。

そしてもつとも問題なのが帰宅する時だ。

「森崎さんお疲れ様。もう遅いし送るよ」

誰もいないオフィスに響く声。

千草はため息をこらえて「結構です」といつもと同じ返事を返した。あれだけひどい言葉を言ったのに悠也には通用しなかったようで普通に千草の私生活を垣間見ようとしてくる。

「でももう9時だ。女性には危ないよ」

「まだ9時です。私は平気ですので。ではお疲れ様です」

「ちょっと待ってよ」

歩き出した千草を追いかけて隣りへとやってくる。

「なんでそんなに嫌がるんだ？いいから送られてるよ。それに腹減ったからどつかで飯でも食って帰ろう」

そう言うとき悠也は千草の手を取りどンドン歩いて行く。

突然の行動に啞然としていたがエレベーターに乗り込んだとき懐か

しい手の感触に気づき繋がれていた手を振り払った。

「やめてよつ。歩いて帰れるしごはんも家に帰って食べる!」

「はい黙って。あんまりうるさいとその口ふさいじゃうかもよ?」

「何言ってるのよ!」

千草は自分の降りる番号を押そうと手をのばした。
しかしそれは届く前に悠也に捕まった。

「俺は警告したからな?」

悠也は笑みを浮かべてそう言つと千草の顎を掴み自分の方へ向かせると唇を奪った。

それは奪ったという表現が似合わないほど優しい触れ合いだった。

息子3

「ん・・・っ」

なかなか離れない唇に息苦しさを覚え甘い声が漏れる。
押し返そうとするが頭と腰にしっかりと手がそえられていてびくともしない。

いい加減にしてよ！！

あまりの横暴さに千草は悠也の足を思いっきり踏んだ。

「い・・・ってー！！」

狭いエレベーター内に悠也の声が響く。

しゃがみ込む悠也を上から睨み1階のボタンを押す。

「ふざけたことするからよ！もう二度としないで」

「・・・いやだね」

「え！？」

「いやだっって言っただよ」

悠也は勢いよく立ち上がると千草を見下ろしながらニヤツと笑った。

「・・・何ですよ？それって私があんたを捨てたから？」

「捨てた自覚があるんだ？そうだよ。俺の気持ちはあの時のまま止まってる。千草との未来を夢見てた時のままな」

未来？

私と悠也との？

それは千草も夢見ていたこと。

あの一瞬で壊れてしまった今はもうありえない未来。

「私の時間はもう進んでるの。立ち止まってなんかいられない」

悠貴のためにも。

千草はそう心の中で呟きながらちょうど止まったエレベーターから降りる。

その時。

「ママ！！」

保育園のママ友達が見てくれているはずの悠貴が涙を目にためて千草に駆け寄ってくる。

その後ろには友達が申しわけなそうな顔で立っていた。

悠貴は走ってきた勢いのまま千草へ飛びついてきた。

「ママ！遅いよ！」

ギョツと足にしがみついて離れない悠貴から視線を後ろへやると悠也がこちらへ来ようとしていた恰好で固まっている。

息子4（前書き）

今回いつもより更新遅くなりました。

感想をくださった方、とても励みになりました。
ありがとうございます。

息子4

「ママ？うちに帰らないの？」

固まって動かない千草を悠貴がじれて揺らす。

それにハッと意識を戻した千草は立ち止まったまま未だ足にしがみついている悠貴を見ている悠也へ視線をやった。

その場に残っていたのは3人だけで悠貴を預かっていてくれた友人は二人の空気を察して帰ってしまっていた。

「・・・すみません。お先に失礼します」

気まずい空気に耐えることなどできず呆然と立ち尽くす悠也を置いてさっさと帰ろうとしたがうまくいくわけもなくすぐに追いつかれ腕を捕まえた。

「ちょっと待て！お前・・・結婚してるのか？」

「・・・してないわ」

どうせ嘘をついてもすぐバレると思い素直に返事を返した。

「ならその子は・・・俺の子なのか？」

「違う！！この子は私の子よ。私が一人で産んで一人で育ててきたのっ」

「俺の子なんだな・・・」

千草の言葉を聞いて悠也は確信したらしくそう呟くとじつと悠也を見上げていた悠貴へ視線を向けた。

ゆっくりと膝をつきくりつとした大きな目で好奇心いっぱいに見ている我が子に笑みを浮かべた。

「はじめまして。俺は榊悠也です。君の名前は？」

「森崎悠貴」

「ゆうきか・・・どんな字を書くんだった？」

黙って二人のやりとりを見ていた千草はその言葉にドキッとした。千草を見ている悠也から目をさらせて答えた。

「・・・あなたと同じ悠に書いて書いて悠貴よ・・・」

「そうか・・・悠貴。何か食べたい物はないか？」

「えゝ？ いったいあるけど・・・パフェがいいな！ おっきいやつ」

「はは、そうか。じゃあ今からおっきいパフェ食べに行こう」

そう言うとその大きな手で悠貴の手を包んで二人して歩きだしてしまった。

ええ！？ ちょっと！！

ありえないわっ。

「待ちなさいよ！！ 悠貴！？ もう家に帰るわよ」

「やだあ。おじさんと今からパフェ食べにいくんだもん」

「悠貴」早くしろよ。置いてくぞ」

「もう・・・っ」

なんとか止めようとした千草の言葉はあっさりと遮られた。

言い返そうとしたが結局悠貴の楽しそうな顔に負け何も言えず千草は仕方なく後に続いた。

心の隙間

3人は会社の地下の駐車場へ来ていた。

千草は悠也の車を見て相変わらずだな。と感じつい笑みがこぼれてしまう。

それに気がついた悠也はムツとした顔で千草を睨みつけた。

「なんだよ？」

「別に・・・相変わらず車には興味がないのね」

悠也の外見からしたら派手な外国車などを乗り回してそうなのに昔から車には興味がなく乗ればなんでもいいと言って軽自動車に乗っていたのだ。

それは今も変わらずのようで可愛い水色の車が止まっていた。

「よし。悠貴は後ろに乗れよ？お母さんを前に乗らせてやれ」

「えゝ？しょうがないなあ」

「いいわよ、私は後ろで！悠貴を前に乗せて」

「いいから前に乗れ」

悠也に強く言われ結局千草は助手席へと乗り込んだ。
ドアを閉めようとしたときそのドアに手を添えていた悠也がぼそつと言った。

「言つたる？助手席にはお前以外乗せないって」

それだけ言つとドアを閉めてくれた。

千草はその言葉に顔が熱くなるのを感じた。

覚えてたんだ・・・。

つきあっていた頃、悠也はそう言つて千草以外絶対助手席に人を乗せなかった。

あの頃はそれが自分を特別扱いされていると思つて嬉しくて仕方なかったのを覚えている。

でも・・・。

しかしその気持ちもすぐに冷めていく。

そんな言葉信じられない・・・。

千草の心は結局あの出来事によつて悲しみへと突き落とされ行くのだ。

悠也何を言つても信じられない。

「おい、シートベルト締めろよ」

「え・・・ええ」

悠也は千草がシートベルトを閉めたのを確認するとゆっくりと車を走らせた。

心の隙間2

車は会社からちょっと行っただころにあるファミレスの駐車場へと入って行った。

悠貴は興奮した様子で車の窓にへばりついている。

普段外食をすることはないので嬉しいのだろう。

「さ、着いたぞ。本当はもうちょっといいところだと思っただけ。こういところの方が気兼ねなく話せるからな」

その口調はすべて聞きだすまで返さないと云っているように聞こえて千草の心を重くした。

帰りたい……。

そう思うがあれだけ嬉しそうな悠貴を見てしまえば無理矢理連れて帰るわけにも行かず結局仲良く手をつないでいる二人に続いて千草も店内へと入った。

4人席へと案内され横へ一緒に座った悠也たちの前へと千草が座る。

「悠貴、どれにする?」

「うん……ぼくこれにする!!」

「チョコレートパフェだな。千草は?」

「え……私は別に」

「わかった。このハンバーグセットでいいな。すみませーん！」

いらなと言おうとした千草の言葉をさえぎると昔からよく頼んでいたものを勝手に頼まれてしまった。

こんな些細なことを覚えていてくれている。
嬉しい。

そう思う気持ちを抑えることができない。

「ごめん、ちょっとお手洗い行ってくる」

「ああ」

零れそうな涙を隠すため千草はそう言っていると席を立った。

家族

千草がトイレから戻るとすでに料理がテーブルに並べられていた。待ち切れなかったのか悠也たちはすでに食べ始めている。

「ママおそいよ！もうたべちゃってるよ」

「ほんとだ！！こっちは仕事頑張りすぎて腹へってんだ」

「ごめん・・・」

熱々の湯気をたてたハンバーグを前にするとすいていなかったお腹が急に空腹感に満たされてくる。

がつがつ食べている二人を前に千草も席について食べ出した。

視線を感じて顔を上げると悠也が千草の手元をじーっと見ている。

「・・・何？」

「うまそうだな・・・俺の肉と交換してくれ」

悠也は自分の頼んだロースステーキの一切れをフォークに突き刺すと千草の口元へと差し出した。

「ちょっと・・・ここにおいてよ」

「このまま食べればいいだろ？」

「嫌よ。そうじゃなきゃハンバーグあげないから」

その一言が効いたのか渋々ライスの上に肉をおくと一番大きく切り分けられていたものを持っていかれてしまった。

「ああ！！それ一番大きいじゃないっ。返してよ」

千草がそう言ったときにはすでに遅く悠也の口の中へと消えてしまった。

「ひどい・・・」

「ママぼくのあげるから・・・」

悔しそうに悠也を睨みつける母親が不憫だったのかアイスクリームをすくいとったスプーンを悠貴が差し出す。

「悠貴・・・ありがとう」

くしゃつと頭をなでるとそのスプーンへとかぶりつく。
ちよつと溶けかけていたが口の中で甘さが広がり千草の顔も自然にほころんでいく。

「おいしい・・・悠貴もハンバーグ食べる？」

「なんだよ。俺だけ仲間外れか？」

「しょうがないな。おじさんにもぼくのアイスわけてあげるよ」

「お、じゃあ悠貴もこれ食べる」

本来これが当たり前の風景なのだろう。

そんなことを思いながら千草は二人を見ていた。

両親がそろっていて休みになれば三人でいろんなところへ行っ
て遊んで。

下手したら家族も増えていたかもしれない。

私間違えたのかな・・・。

あの日悠也から逃げたことが今思うととても悪いことをしたように
思えてしまう。

でもあの頃の千草には耐えられなかった。

本当に悠也を愛していたから・・・。

たった一度の過ちも許せないだろうくらい。

「千草、どうした？」

二人が心配そうな顔をして千草を見ている。

「え！？何でもないわ。ちょっと疲れてるだけ」

「そうか・・・そろそろ本題に移りたいんだけどいいか？」

本題・・・。

そうだ。

話がしたくて・・・。

「とりあえず悠貴。お前はあっちで遊んでろな？」

店内に設けられているキッズコーナーへと悠貴を促すと悠也は千草へと向き直った。

「最初から全部話せよ？隠し事はなしだ」

「・・・」

「突然別れ話をしてきたことはなんでなんだ？俺が嫌いになったとか信じると思ってるのか？」

そんなことは千草も思っていなかった。

その日も朝まで一緒にいたのだから。

「・・・見たのよ」

「え？」

「私見たの。悠也が女と抱き合ってキスしてるところ」

深く息を吸い吐き出すように言った。

悠也の顔を恐る恐る見ると目を見開いて千草を見ていた。

家族2

一向に固まっただまの悠也に千草はイライラしてきていた。

「ちょっと！！人の話聞いてる！？あの日・・・私が教授に呼ばれて悠也を待たせるとき・・・」

今でもはつきりと思い出せる。

女の腰に回している腕。

「許せなかった。だから別れてって言ったの！！それから悠也から離れたくてここに来たの。それで悠貴を妊娠してるってわかって・・・でも誰にも言えなくて結局ここで働きながら生んだ。悠貴を下ろすことなんて考えもなかった。悠也の子供だから・・・だから私」

「ちょっと待て」

いままで固まっていた悠也が千草の話を遮った。
溢れそうになる涙をこらえながら顔を上げた。

「ちょっと待て。思い出すから・・・あの時だよ・・・な？たぶん・・・千草・・・それ誤解だから」

悠也ははつきりと否定した。

「・・・誤解？なっ、どういうこと！？私ちゃんとこの目で見たんだよ！？」

「いや・・・見たことは本当なんだがそれは事故だったんだ」

「は？」

「あの時お前を教室で待つてたんだがその時同じ学科のしゃべったこともないような女が話しかけてきて・・・うざかったから無視してたんだけどそれが癪に障ったのかいじつてた携帯とられてさ・・・取り返そうとしたらその女が机に引っ掛かりやがってとっさに助けたら調子に乗りやがって抱きついてきて。引きはがそうと手をかけたら俺の首に腕巻きつけてきてぶちゅっと・・・」

その時を思い出しながら嫌そうな顔をして話す悠也。

千草は声も出せずにいた。

「事故だし千草に言つて心配掛けたくなかったから何も言わずに・・・そしたらお前が突然別れるって言いだして。別れたくなんかなかったから拒否してたのに姿は消しちゃうし」

チロツと見てくる視線が痛い。

私の勘違い・・・？

「うそぉ」

今まで我慢していた涙が次々とあふれてくる。

それに驚いた悠也は手近にあったナプキンで千草の頬を拭ってくれている。

「泣くなよつ。あゝあ。とりあえず店出よう」

机の上にある伝票を取ると千草の腕を掴み悠貴をひきつれて店を出

た。

家族3（前書き）

久しぶりの投稿です・・・。

家族3

「お前たちの家ってどこ？」

再び車に乗り込んだところで悠也が言った。

「俺のところは短期間だから狭いし何もないんだ。それに悠貴を寝かせたほうがいいだろうから千草の家の方がいいだろう？」

「そうね・・・」

悠也の言うことももつともなので千草は素直に道案内をした。

出発地からたいして離れていなかったのですぐに家へと着いた。

うとうととしていたところを起こされてぐずる悠貴を悠也が抱き上げたので千草は先立って部屋へと向かう。

「ここはちゃんと防犯されてないだろう？大丈夫なのか？」

「そんなこと言ってられないわよ。あたしの給料じゃ安いし・・・どうぞ」

「ああ」

何か言いたそうな悠也を無視して部屋へと促す。

後に続いて部屋に入った千草は鍵をかけると悠也を追い越して部屋の明かりをつけた。

悠貴を受け取ろうと振り返れば悠也がすでに次の部屋へと入っていた。

「あ、ちよつと待つてよ。今布団敷くからっ」

「ん・・・悠貴？」

悠也が呼びかけたが本格的に夢の世界へ行っているらしく何も反応がない。

「重いでしょ？ここに寝かせて」

「これぐらい大丈夫だ」

そう言いながら千草がしめす場所へそつと悠貴を寝かす。

布団をしっかりとかぶせると優しく髪をなでる悠也の様子に胸が痛くなる。

自分の勘違いで私は悠貴から父親を奪ってこの人からも・・・。

「千草。自分を責めるなよ」

「え・・・」

「お前の考えてることなんてわかるんだよ。そりや突然別れ切り出されて姿も消して再会すれば冷たくされて意味分かんなくて腹が立つてたけど今はもうどうでもいい。悠貴もいるし千草の誤解もとけたんだろ？昔のことだ、ここから3人の未来を始めればいいじゃないか」

「悠也・・・」

「俺は心が広いからな」

「ごめんなさい・・・許して・・・っ」

その場で泣き崩れる千草へ悠也は近づくと強く抱き締めた。

「もう何があっても離さないから・・・で、これからはお互い思ったことは言っていこう。すれ違うのはもう嫌なんだ」

「わかったわ。約束する」

「悠貴には明日俺が父親だって事もいうからな」

「ええ」

今まで気が張っていたのがすべてなくなって体が軽くなっていく。しっかりと抱きしめてくれる腕にもたれかかると腕を掴まれて体が離される。

二人の視線が合わさり悠也の顔が近付いてくる。

千草は逃げることもなく瞼を閉じるとその時を待った。

最終話

悠貴は目を覚ましても悠也がいたことに喜んだ。

「悠貴、今から大事な話があるから聞いてほしいの」

「なに？」

「今まで悠貴にはパパがいなかったでしょ？遠い所にいつちゃったからいないんだって。でもね、帰ってきたの」

千草はそう言うとき悠也を振りかえった。

悠貴の目はまんまるく開いている。

「おじさんが僕のパパなの？ほんと？」

「ああ。俺の事パパって呼んでくれる・・・うわっ？」

悠也が言い終わる前に悠貴が飛びついた。

「やったー？ぼくのパパだ？もうずっと一緒？」

「ずっと一緒だ」

笑いあう二人を見ている千草の目に涙が溢れて止まることなく流れている。

再び出会い今ここに三人が家族としていられる事がどれだけすごいことなのか、感じずにはいられない。

千草はこの幸せを決して離さないと心に誓った。

最終話（後書き）

仕事が忙しくなかなか更新出来ずすみません。

そんな私を捨てないで最後まで見てくださった方々ありがとうございます。

本当にありがとうございました？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9263q/>

真実は目の前に

2011年11月5日23時55分発行